

H29地域協働研究（ステージⅠ）

H29-Ⅰ-02「台風10号災害からの復興に向けた農業を核とした地域活性化の取組 ～釜石市橋野地区を事例として～」

課題提案者：岩手県

研究代表者：総合政策学部 吉野英岐

研究チーム員：村瀬勝洋（岩手県農林水産部農村計画課調査課長）、佐藤桂祐（同主査）

<要 旨>

岩手県の中山間地域は、人口減少や高齢化の傾向が著しく、集落の機能が低下し、農業生産機能や県土保全等の多面的機能を果たすことが困難になりつつある。岩手県では、農業を核とした中山間地域活性化の推進方向を示す「いわて農業農村活性化推進ビジョン」を平成28年2月に策定し、モデル地区への重点的な支援を行っている。本研究では昨年度の研究に引き続き「橋野地区（釜石市）」を取り上げる。橋野地区は平成28年8月末の台風10号災害により甚大な被害を受けた。特に、笛吹峠の通行止めにより、農産物直売所の来場者や販売額が減少している。そこで、地域資源を活かした農業生産、加工・販売等の実現に向けて、総合政策学部吉野研究室の教員と学生が現地を訪問し、現地調査とワークショップを実施し、活性化のアイデアを提示し、住民の意欲の向上とビジョンの実現に寄与した。

1 研究の概要

①解決すべき課題および研究の必要性

岩手県の中山間地域は、県土の8割を占めている。中山間地域は、農業生産機能はもとより、県土保全、自然環境維持、地域に根ざした伝統文化の継承などの多面的機能を有している。これらの機能の維持増進には、住民による農業生産活動の継続が不可欠であるが、中山間地域は平地地域に比べ人口減少の度合いが大きく、農業者の高齢化も進んでいることから、今後、急激に地域活力が低下することが懸念される。

岩手県は平成28年2月に「いわて農業農村活性化推進ビジョン」を策定し、本格的な対策に乗り出している。ビジョンの策定・実施にあたっては、農業振興による所得向上や雇用創出等の具体的な成果の検証および地域への波及効果の測定の手法開発と提示が喫緊の課題になっている。

②実施方法・取組みの概要

本協働研究では、平成28年度の研究に引き続き橋野地区（釜石市）を研究対象とした。橋野地区は、「橋野鉄鉱山」が平成27年に世界文化遺産に登録されたほか、ラグビーワールドカップ2019の開催を控え、交流人口の増加が見込まれている。そこで、橋野地区は平成28年度に「地域ビジョン」を策定し、モデル地区に選定された。そして、福島第1原発事故の影響で収穫ができなくなった原木シイタケ等の代替作物として舞茸を導入し、さらに新たな地域の特産品として梅の栽培に取り組み始めた。

しかしながら、平成28年8月末の台風10号災害により地域は甚大な被害を受け、道路の寸断や笛吹峠（主要地方道釜石遠野線）の通行止めなどにより、農産物直売所の来場者や販売額が減少してしまった。

こうした状況で、橋野地区は特産品の開発による農産物直売所の活性化に一段と力をいれて取り組む必要性が高まった。そこで本協働研究として引き続き、橋野地区を対象に、農産物の栽培や開発にむけて、学生からアイデアを

出したり、住民の意見を集約して、地域の復興と活性化に取り生むこととした。

2 研究の内容

今年度は舞茸、梅と並んで、橋野地区にあるそのほかの地域資源を効果的に活用するために、県立大学の学生が商品開発に向けた方策の提案等を行うとともに、ワークショップを開催して、農産物直売所への誘客増加に向けた検討を行った。具体的には、教員と学生8名が平成30年2月15日～16日に現地を訪問し、聞き取り調査とワークショップ、意見交換会、学生によるアイデアの提示を実施した。

2月15日は橋野どんぐり広場の直売所の見学のと、橋野地区内の早稲集会所で先進地の事例検討として、遠野市内の道の駅「遠野風の丘」支配人の佐々木教彦さんの講演を地区住民と学生で聴き、質疑応答を行った。ついで、地区住民と学生のワークショップを始め、地域で栽培している野菜やかつて栽培していた野菜の種類をあげてもらい、地区のイメージを共有した。その後、学生は地区の状況を踏まえて、地域資源として新たに「きくいも」などを取り上げることとして、その活用方法を議論した。

2月16日は地区住民へのアイデアの報告のための作業を行った。その後、再び地区住民に集まってもらい、アイデアを模造紙にまとめた作品を、学生が報告を行い、地区との意見交換を行った。その後、地区の伝統行事であるみずき団子の飾りつけ体験を共同で行い、地区住民と学生のコミュニケーションを図った。



風の丘支配人の講演



講演を聴く地元住民



意見交換の様子



みずき団子の飾り

3 これまで得られた研究の成果

ワークショップでは、2つの学生チームから地区への提案を行った。提案の中には地区住民の反応の高かったアイデアもあり、今後、台風災害からの復興において、住民の意欲の増進や新たな取組みにつながるものと考ええる。

提案1 産直へ行こう！

構成学生：小山ありす、佐々木彩那、吉田智貴

(1)課題

産直で販売している作物が夏期は36種類に対して、冬期は13種類と半分以下になってしまうことが課題である。そこで、冬期の品数不足の解消として、地元ならではの加工品を作ることと、対面販売を重視し、サービスを充実させて、地域間の交流を深め、集客を図ることを目指す。

(2)商品提案

橋野地区が今後、生産に力を入れていこうと考えている梅、舞茸、菊芋とそれぞれの加工品という以下の4つのグループに分けて商品提案をした。

- ・梅で梅酒、梅カクテル、梅ゼリーを作る。
- ・舞茸と梅で梅舞茸茶、炊き込みご飯の素、ふりかけを作る。ふりかけは乾燥させて粉末状にすることで、日持ち効果もあり、お茶漬けにもできる。
- ・菊芋で菊芋焼酎、キク大学芋、粉物（片栗粉等）、菊芋チップスを作る。
- ・そのほかの加工品として、くるみアイス、くるみアイス大福、鹿ソフト・鹿ロールケーキ（橋野地区に出没する鹿をかたどったもの）を作る。

(3)販売方法

- ・対面販売を重視し、お客様に直接商品の良さをPRする。
- ・視覚効果を狙って、オリジナルのPOPやパッケージに「橋野」の名前を大きく取り入れ、自信をもって販売する。
- ・商品をお客様の腰の高さより上に陳列させることで、目線を上に上げ、店内を明るく見せる。
- ・店内にイルミネーションやどんぐりを活かした装飾（どんぐりのれん）、スタンドグラス、ドライフラワーなどを用いておしゃれなレイアウトを施す。
- ・サービスとして、誰でも無料で飲める梅舞茸茶などを設置することで、リピーターを増やす。

(4)宣伝方法

- ・店内にフォトスポットを作ることで、SNSでの情報発信効果を狙う。
- ・SNSに写真を投稿してくれたら、何かをサービスするような特典を付ける。

提案2 橋野どんぐり広場

構成学生：伊藤一輝、稲田泰成、鈴木絢子、菊池瑠那

(1)課題

直売所の課題として、人手が不足している点、地区住民が高齢化している点、販売品目の季節変動の存在に加えて、店舗が人目に止まらず、わかりづらい点が指摘された。対策として、顔出し看板を設置し一目で店舗とわかるようにしたり、橋野鉄鉱山の資料館化を目指す。

(2)商品提案

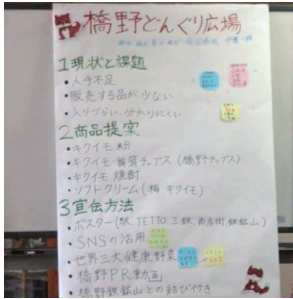
- ・菊芋を粉末にして菊芋麺などに応用する。
- ・菊芋と舞茸をチップス化して、橋野チップス（揚げ物なのに菊芋の効力でヘルシー）として商品化する。
- ・菊芋を原料に焼酎を作る。九州地方に既存品があるらしくオリジナリティをだすため梅を配合する。パッケージにはイヌリン・キクリンという双子のマスコットキャラクターを表示する。
- ・梅と菊芋からご当地ソフトクリームを作る。

(3)宣伝方法

- ・釜石駅、TETTO、三陸鉄道、商店街、橋野鉄鉱山に直売場のポスターを掲示する。
- ・SNSを活用する。
- ・世界三大健康野菜（菊芋、ヤーコン、アピオス、いずれも橋野で栽培実績がある）としてアピールする販売企画を立てる。
- ・橋野PR動画を作成し、橋野鉄鉱山との結びつきを訴える。



提案1のプレゼン



提案2のプレゼン

4 今後の具体的な展開

今後は、今回の提案のなかから実現可能で効果が期待できるものを選択して、実際に、直売所で販売したり、企画を立てていくことが大切である。商品としては、舞茸と梅の炊き込みご飯の素、くるみアイス大福、鹿ソフト、鹿ロールケーキ、企画としては、世界三大健康野菜のセット販売や橋野PR動画の作成と発表などが期待される。

5 その他

今回の研究を実施するにあたり、岩手県農村計画課および農業振興課、岩手県沿岸広域振興局農林部、釜石市役所農林課、橋野町振興協議会の協力を得ました。そして、ワークショップに参加された地元の住民や関係者の方々、提案を行った岩手県立大学総合政策学部の学生に改めて謝意を表します。